

特集・学園めぐり □ 愛知学院大学

仏教は誰のもの

——国際仏教交流センターの確立——

愛知学院大学文学部助教授

引 田 弘 道

仏教の国際性

仏教は本来国際色豊かな宗教であった。これは同じ南アジアで起こった宗教であるヒンドゥー教がその民だけをその対象とするのと大きく異なる点である。仏教は民族・地域の枠を越えてアジア全体に広がり、それ故に「世界宗教」と呼ばれるようになったのである。仏教の伝播

の地域と聖典言語を問題にすれば、漢訳経典やチベット語訳経典を中心とする北方アジアに広まった大乘仏教と、パーリ語聖典を中心とする南方アジアに広まった上座仏教とに大別することが出来る。このうち、前者は信仰心に力点が置かれ、後者は戒律の遵守に力点が置かれた。即ち大乘仏教と信仰心、上座仏教と戒律という大まかなグループニングが可能になるのである。

もちろん大乘仏教も戒律を無視した訳ではなく、上座仏教にも信仰心は重要な要素であるが、その力点の置き方を問題にすると、先のように分類出来るのである。

ところで、戒律はそれを個人レヴェルで遵守することが第一義であるが、同時にこの戒律の伝統を保持し後世に伝えていくこともまた仏教にとって不可欠な責務である。もしなんらかの社会的、あるいは僧団内の原因によって、戒律の伝統が破壊されてしまったならば、その教団は「死に体」に等しく宗教活動は大いに制限されてしまうのである。そこで南方の上座仏教はスリランカ・タイ・ミャンマーの国にある仏教教団が相互補完的に戒師を融通しあつて、全体として戒律の伝統を守り、ひいては教団の維持がなされてきた。たとえば現代スリランカの上座仏教の諸派のうち、アマラプラ派とラーマニヤ派はミャンマーから、そしてシャム派はタイ

から逆輸入されたものである。元来上座仏教はスリランカを中継地としてタイやミャンマーに移入されたにもかかわらず、戒律の伝統が途絶えた仏教を復興しようとする場合には、他国の戒師を必要としたのである。

このことは何も上座仏教に限ったことではない。わが国においても日本に正式な戒団を設置し、具足戒を受けた正式な僧侶育成をめざした栄叡や普照の懇願を受けて、鑑真和上は渡航の危険を犯してまでもやって来たのである。鑑真和上建立の唐招提寺は、「唐代の四方サンガ」を意味し、地域・空間に限定されない理想的な戒律中心の僧団を目指したものである。

このように、仏教は各地に伝播したという結果から判断して世界宗教と言うのではなく、寧ろ戒律を核にして、その伝統保持の為に国や地域のボーダーを越えて互いに助け合ってきたからこそ、そのような名前が冠せられたのだと結

論して良いのではなからうか。

国際化する日本の欠陥

現在の日本経済は間違いなく国際化の道をひたすら走っている。企業はその生産の拠点を次々と海外に移し、国内の空洞化が心配され始めているほどである。さらに円高は日本人の海外旅行を日常的なものへと変貌させている。ひと昔前、一部の特種階級の者だけに許された「洋行」という言葉は現在死語と化している。日本経済の発展は、交通や通信手段の格段の向上と相伴って我々をグローバルな人間へと変えてきつつあるのである。また日本にやって来る外国人の目的は単なる観光から、ビジネス、労働や留学へと多岐に亘り、しかもその数は年々増加する傾向にある。

さらに日本の経済力は「政府開発援助」(ODA)として多大な資金をアジア諸国等に援助し、



その使用方法の是非はともかくとして、戦後の荒廃から短期間にして世界有数の経済大国を實現した国という認識を彼らに植え付けるのには十分であったと思われる。つまり現在の日本は経済的面だけからすれば、アジアの優等生であり、アジアの星なのである。

ところが、先のODAも「ばらまき外交」ではないかという批判があるように、どのような原則をもつて行うのか、いま一つはつきりしない。留学生の受け入れについても同様である。技術以外の日本の何を彼らに理解してもらうのか、あるいは帰国した彼らに何を期待するのか、これもまたはつきりしないのである。元来、島国日本は異なる民族との交流が少なく、そのため自己の独自性を確立する必要もなかった。限られた集団内でどのように個性を殺しながら他者と協調していくかということには慣れていても、異なる文化や価値観を持つ人たちと接し

た際に、個性をどのように他者にアピールするかという点は全く不慣れた民族であると言える。

日本仏教の閉鎖性

日本仏教は江戸時代に成立した寺請制度により経済的基盤が確立されたが、それと同時に葬式や法事といった祖先供養の面のみに活動を限定され、必然的にダイナミズムが失われていった。それ以前の仏教は政治の中枢に接近することはあったが、それはまたその時その時の社会的・政治的要請に応える活動を行う必要もあつたわけで、その意味では非常に時の社会情勢に敏感であつたと言える。

寺請制度は同時に宗派のセクト性を増長させていった。江戸期に壇林等で盛んに研究されたのは、各宗派の宗祖の教義であつた。その教義を宗乗、その他の通仏教を余乗とはつきり分別

したのもこの項である。現在の宗学が宗乗の、そして仏教学が余乗の伝統を引き継いでいるのは言うまでもない。しかも鎌倉時代の宗祖たちが他宗から自らの宗の独自性を確立するため、只管打坐、専修念仏、唱題といった誰にでも出来る簡明な修行方法を標榜した為、自力と他力、禅と念仏には同じ仏教とは思えないほど大きな隔たりが生じた。これは韓国の仏教など禅をしながら同時に念仏を修するといった東アジアに認められるものと大きく異なる。

ところでこの寺請制度は農村を中心とした人口移動の少ない時代にはそれなりに有効に機能していた。特に各寺はその地域の人々の戸籍調査等の役割を果たしており、時の中央政府の出先機関としての機能を持っていたのである。しかし、戦後急速に都市化が進み、農村の過疎化と人口の大都市集中が加速されると、この制度の持つ先の機能さえ失われていったのである。

都市に移り住んだ一世はともかく、二世、三世になると、彼らと出身地域との交流はなくなると同時に先祖からの菩提寺への参詣の回数も少なくなっていく。寺請制度の束縛から離れた彼らは、今度は精神的支柱を求めて、新興宗教にも救いを求めるようになった。というのも都市の墓地や霊園は高く、容易に都市部の寺院の檀家になることは出来ないし、祖先供養を柱とした「家制度」の維持よりも個人的な利益を求めめる方が彼らの興味をひいたからである。

日本仏教の国際化

しかしながら、日本の仏教が現在寺請制度にのみ安住して、全く孤立化しているかといえ、そうではない。日本仏教の国際化はまず海外に移住した邦人を対象として、彼らの精神的拠り所、もしくは葬祭の用に利することを目的として、移住者の多い地域を中心に各宗派がこぞつ

て別院、または独立寺院を建立し彼らの布教の核とした。曹洞宗を例にとるならば、ハワイ、

北米のカリフォルニア、南米のサンパウロにこれらの寺院が集中している（寺院名鑑を参照）。

次に注目すべきは西洋人への積極的な布教である。これは鈴木大拙や弟子丸大仙らによって積極的に進められ、日本の仏教、特に禅仏教に興味を持つ西洋人が少しづつではあるが増えてきた。彼らは禅の持つ幽玄な境地を通して東洋の神秘に到達しようと考えたのであろう。あるいは実修的禅定がキリスト教の伝統的修行方法である瞑想と深く関連していたものとも推察される。最近示寂された前角博雄老師も弟子丸老師に劣らない布教師であった。師は昭和三十一年ロサンゼルス禅宗寺駐在開教師として渡米して以来、ロサンゼルス禅センター佛真寺、並びに陽光寺を開創された他、ニューヨーク、フランス等世界各地に禅道場を建立し禅の高揚に努め

られた。出家得度の弟子五十数名、授戒の弟子は八百余名にもものぼるといふ。

一方、当地で禅の教えを受けた彼ら西洋人たちのうち、本場の道場でより厳格な修行を實踐したいと思う者も出てくるようになった。そして彼らの熱意に応えるべく、日本にも彼らを積極的に受け入れる道場も出現した。福井県小浜の発心寺は数多くの外国人が修行していることで有名であるし、曹洞宗の本山にも国際部が置かれ彼らの受け入れを行っている。また浄土真宗では、本願寺派が中心となって浄土三部経を始めとする重要經典の英訳の出版を行い、国際語による浄土教の布教に努めている。これに関連して、国際伝道協会による仏典の英訳事業も見逃すことは出来ない。その他各宗派が現在取り組んでいる国際化は枚挙にいとまがない。

仏教の眞の国際化を目指して

ただこれらの各宗派の布教は、当然のことながら、自らの所屬する宗派に限定されている。

日本仏教全体とか、アジアを含めた仏教全体を西洋人を始めとするキリスト教徒に布教することとは、理論的に可能であるとしても、実際には荒唐無稽な発想であろう。少なくとも自身の宗派の素晴らしさを異教徒に理解してもらふことが重要なのであり、その他の宗派やましてやアジア仏教全体は彼自身の能力の範囲を越えたものである為、布教者が真摯であればあるほど、それは不可能なことになるのである。しかしこのような布教方法は、大ざっぱに言えば「外国人の日本文化理解に努める」ことに他ならないのであり、仏教が本来持つ国際性からはほど遠いように考えられる。先に述べたように、仏教は戒律の伝統の遵守を金科玉条として、南・東

南アジア各地で相互補助しあつて来た。日本でも最澄の大乗戒壇運動以前は四分律を中心とした中国・日本との交流は、戒律遵守という仏教文化の共有を背景としていた。

しかし現在の日本仏教はその多くが四分律ではなく、信仰心を主とした大乗戒に依拠しているため、これらのアジア諸国の仏教との積極的交流の必要性は感じていない。あるいは全く戒律の概念を放棄した宗派もある。それ故戒律を主にしたのでは、仏教の国際化は日本では無理のように考えられる。では日本仏教にとつて眞の意味での国際化とは何であるのか。それは上座・大乘の区別を超越したグローバルな仏教情報センターの確立であろう。少し前愛知学院大学に留学しているアジアからの留学僧と懇談する機会を得た。彼らに共通することは、我々が考える以上に上座仏教とか大乗仏教の区別をしていないことであり、さらには異なる聖典言語

の壁をも難なく飛び越え得る国際性を持ち合わせていることである。彼らにとって仏教とは「仏陀の教え」そのものであり、それ以上でもそれ以下でもないのである。仏・法・僧の三宝に帰依するのであれば、仏教徒どうしの連帯意識を持つことが可能になっている。彼らと比較すると我々日本人は余りにも些末なことに縛られて、大きな水平的な視線を失っているのではあるまいか。

彼らの持つおおらかさ、換言するならばダイナミズムに応えるには、ある特定の宗派意識を捨てることがまず第一に要求される。次に必要なのは、仏教情報の交換である。先にも述べたように、日本での仏教の国際化は宗派単位ではかなり積極的に行われている。しかし各宗派の情報を交換すること、さらにそれをアジア各地の仏教の拠点に提供すること、反対にアジアの仏教情報を日本の各拠点に提供すること、この

ような仏教情報の中継組織はまだないように思われる。あるいはあるかもしれないがその活動はまだまだ大規模ではないのであろう。従来仏教に限らず情報というものはストックするものと考えられてきた。なぜならばいち早くより有益な情報を得た者が勢力を伸ばすことが出来たからである。過去に製鉄の技術は強力な武器を發明し、それによって他の民族の侵略を容易せしめたし、現在でも企業や国は他の情報をいち早く入手しようとするようになってきている。それ故、価値ある有効な情報はなるべくストックして、他者に知られないよう秘匿するのが常識であった。

しかしマス・メディアの急速な発達、情報のストックからフロー（流れ）にその力点をシフトさせ始めている。情報をどのように対話的に流すのが、今後のメディア産業に課された大きな問題となっているのである。このことは

南無文聖不動的王
斬悅懺悔
大祖罪障滅除
煩惱滅除業障



善光寺
法印三光院
印

また日本の仏教にも言えるであろう。島国日本は仏教伝播のどんづまり地域であり、中国からの最新の仏教情報は彼の他に留学した僧たちによって持ち帰られ、日本にストックされていった。しかし現代では日本は仏教情報の受信地域だけではなく、発信地域にもなっている。とすれば、そのような両機能を満足させ得るだけの情報センターの確立が必要になるであろう。このセンターを經由してアジア・ヨーロッパ・日本の仏教情報を双方向的にフローさせれば、必ずや仏教を総合的に発展させることが可能になるのではあるまいか。また日本各地で国際化に取り組んでいる寺院や団体をネットワーク化することによって「点から線へ」仏教の活動を展開させることが出来るのである。その意味で善光寺の黒田武志住職のやっておられる活動は注目に値しよう。宗派にとらわれず、さらに日本人ばかりではなくアジアからの留学僧にも育英

金を拠出しておられるのは、このセンター構想にとって一番基本的活動である。願わくば日本の志を同じくする個人や団体との連絡、アジア地域の寺院への積極的情報交換を今以上に進めて頂ければ、筆者の理想に近づくものと期待している。

今後、情報活動が盛んになるにつれ、今までとは異なる全く新しい形態の仏教組織が誕生するかもしれない。前田恵学博士も既にヨーロッパ人によるヨーロッパ人の為のヨーロッパ仏教の誕生とその活動を報告しておられる。このような現象はさらにもっと各地で起きる可能性を秘めている。しかしそれはそれでいいのではなからうか。

(横浜善光寺留学僧育英会第五回育英生)